

第十一講 歴史学の変遷

歴史主義とは

研究領域としての外交史

歴史家の社会的出自としての教養市民階層

政治的理念としての自由主義

ルネサンス以来の教訓史学から科学的歴史学へ

専門的歴史研究者養成とゼミナール教育

歴史研究者一元化の装置としてのハビリタツィオン(教授資格審査)

歴史主義からの逸脱

文化史への関心

正教授職を得てから

ブルクハルト：バーゼル大学の教授

ランプレヒト：ライプチヒ大学総長

ウェーバー：フライブルク大学・ハイデルベルグ大学正教授

ホイジンハ：ライデン大学総長

ワイマール期：歴史主義への批判

第二次世界大戦後のドイツの歴史研究に大きな影響を及ぼした人々

オットー＝ヒンツェ：国家法制史、ベルリン大学政治・国制・行政・
経済史教授。妻がユダヤ人、オランダに亡命。

1940年に死去。

ローゼンベルク：ユダヤ人，ドイツ社会民主党員、古代史。アメリカ
に亡命、ブルックリン大学教授、社会史学派。

1943年死去。

マイネッケ：ワイマール体制支持派。フライブルク大学／ベルリン大
学。

世界市民思想と民族主義／国家主義との関係を解明。

ナチスの圧力で『史学雑誌』編集者を辞任（1935年）。

1954年に91歳で死去。

彼らはナチスの時代、沈黙を守るか亡命するかして過ごさざるを得な
かった。

第二次世界大戦後のドイツ史学

フィッシャー論争の衝撃

F・フィッシャー（村瀬興雄 訳）『世界強国への道 - ドイツの
挑戦 1914-1918』岩波書店、1972 年／83年。

（従来の定説）

ナチスによる侵略は弁護の余地はない

カイザーのドイツ帝国は複雑な外交関係の網にかかって不承不
承戦争に引き込まれていった

ビスマルクによる複雑な同盟網

オーストリアとの同盟関係

三国協商

バルカン半島における汎ゲルマン主義と汎スラブ主義の対立

皇帝は戦争を望んでいなかった

（フィッシャーの批判）

ドイツ外務省の文書：ドイツの東方政策を記す

フィッシャー：ドイツは積極的に戦争政策を推進した

研究方法は極めて伝統的

ドイツにおける社会史研究の広がり

ワイマール期のヒンツェやローゼンベルクの研究の逆輸入

学校における社会科教育

フランスにおけるアナール派

民衆文化への関心

「心性」や「集合的記憶」

経済学・文化人類学・文学・言語学などとの学際性

フェルナン・ブローデル：『地中海』

事件史と「長期的持続」

アメリカやイギリスにおける人口史研究

リグリーとスコフィールド：『イングランドの人口史, 1541-1871

年, 一つの復元』

【参考文献】

- ゲオルク・G・イッガース（中村幹雄・末川清・鈴木利章・谷口健治 訳）『ヨーロッパ歴史学の新潮流』（晃洋書房）、1986年。
- リチャード・J・エヴァンズ（今関恒夫・林以知郎・佐々木龍馬・與田純 訳）『歴史学の擁護 —ポストモダニズムとの対話—』（晃洋書房）、1999年。
- カルロ・ギンズブルク（杉村光信 訳）『チーズとうじ虫 —16世紀の—粉屋の世界像』（みすず書房）、1984年。
- ピエール・ショーニュ／フランソワ・ドゥス（仲澤紀雄 訳）『歴史の中の歴史家 —瞬間が炸裂するとき—』（国文社）、1996年。
- ナタリー・Z・デーヴィス（成瀬駒男・宮下志朗 訳）『古文書の中のフィクション —16世紀フランスの恩赦嘆願の物語』（平凡社選書）、（平凡社）1990年。
- ピエール・ノラ編（谷川稔 監訳）『記憶の場：フランス国民意識の文化＝社会史』（岩波書店）、2002～2003年。
- ピーター・バーク（長谷川貴彦 訳）『文化史とは何か』（増補改訂版）（法政大学出版局）、2010年。
- F・フィッシャー（村瀬興雄 訳）『世界強国への道 - ドイツの挑戦 1914-1918』（岩波書店）、1972年／83年。
- F・ブローデル（浜名優美 訳）：『地中海』全5巻（藤原書店）、1991年。
- ル・ロワ・ラデュリ（井上幸治・渡辺昌美・木居純一 訳）『モンタイユ：ピレネーの村1294～1324』（刀水書房）、1991年。